

楠本イネの生涯について（参考文献：宇和の人物伝）



楠本イネ
大洲市立博物館所属

イネ長崎で生まれる

◆1827年（誕生）

日本は鎖国体制下で、唯一長崎が開かれた港としてオランダとの交易を行っていた時代、長崎出島にオランダ東印度会社商館医として赴任したドイツ人医師フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトと、日本人妻の楠本滝との間にイネが生まれる。

*シーボルトは、日本だけに存在すると思われるガクアジサイの変種を見つけた時に、植物学上の学名として「ハイドランジア・オタクサ」という学名を付けようとしたが、この〈オタクサ〉は、愛する妻である楠本滝の愛称〈おたきさん〉に由来すると言われている。

父シーボルトとの別れ

◆1829年（2歳）

持ち出し禁制の日本地図などの国外持ち出しを図ったことにより、シーボルトは国外追放となり、帰国する。日本を去る際には、2歳8ヶ月のイネの養育を愛弟子の二宮敬作に託したといわれる。

幼少時代のイネ

◆1829年～1839年（2歳～13歳）

母滝の叔父のもと、長崎で幼少時代を過ごす。イネは5歳のころから寺子屋に通い、読書にふけり、学識欲が強い子供であったため、学問は不要で家事修行をさせようとする母とのトラブルも絶えなかったといわれる。12歳～13歳頃からイネの向学の念はますます強くなっていった。

卯之町での二宮敬作と過ごした5年間

◆1840年～1845年（14歳～19歳）

イネの向学心は高まり、14歳で長崎の母滝のもとを離れ、西予市宇和町卯之町で医者を開業していたシーボルトの愛弟子である二宮敬作を頼って卯之町までやってくる。・・・長崎から卯之町へのコース（長崎～諫早～竹崎～熊本～内牧～菅原～玉田～臼杵～八幡浜～笠置峠～卯之町）・・・

現在、二宮敬作住居跡が西予市宇和町卯之町三丁目の古い町並みの一角にある。当時の敬作は、貧富の別なく手当は懇切丁寧で、急病と聞けば深夜でも山中へも往診し、夜を徹して治療に励んだといわれる。敬作はイネに、医書を与え研究させ、手術の助手として学ばせ、臨床体験を聞かせたりして、医学を教えたといわれる。そして、イネの漠然とした学問への情熱は、確かな医者への夢へとようになっていく。

卯之町からの旅立ち

◆1845年（19歳）

敬作の勧めにより、イネは5年間過ごした卯之町を去り、岡山県の医者である石井宗謙のもとへ産科の修行へ行く。石井宗謙と敬作は、同じシーボルトの門弟であり、鳴滝塾で共に学んだ間柄。イネに本格的な産科修行をさせるために、当時岡山県で産科医を開業していた宗謙に、敬作が依頼したといわれる。当時はまだ、多くの女性が男性の医者から治療を受けることに抵抗感があり、産婆では手に負えない難産も最後まで医者を呼ばずに手遅れになってしまうことが多かった。イネが産科医になる決心をしたのは、敬作の勧めもあり、自分が産科医になることで多くの女性の命を救うことができるという思いからだったといわれる。

はじめての出産

◆1845年～1851年（19歳～25歳）

イネの履歴によると、6年8カ月の間、石井宗謙のもとで産科を修行している。この間に宗謙との子供「タダ」（のちに「高子」と改名）を産む。タダ出生については、その誕生時期も含め諸説あるが、宗謙の強姦によるものとされ、名前の「タダ」も自然から授かる意図しない子供という意味があったといわれている。25歳になったイネはこのあと長崎へ帰郷した。翌年、宗謙は江戸に去り、やがて才が買われ徳川家の侍医に登用される。

イネ、再び卯之町へ

◆1854年～1857年（28歳～31歳）

タダ（高子）を出生後、長崎へ帰郷していたイネは、2年後再度卯之町を訪れ、敬作と、医師・西洋学者・兵学者であった村田蔵六（のちに大村益次郎と改名）から医学や蘭学を学ぶ。当時、蔵六は宇和島藩に出仕しており、イネは卯之町の敬作の家から宇和島の蔵六のもとへ月に何回も通ったと解されている。その後、イネは居を宇和島に構えて勉学を続け、敬作も卯之町の医院を次男の逸二に譲り、宇和島に住む。

父シーボルトとの再会

◆1858年～1859年（32歳～33歳）

シーボルトが再び日本へ来るという知らせで、イネは敬作と敬作の甥である三瀬周三（のちに三瀬諸淵と改名）と共に長崎へ帰り、開業しながらシーボルトの帰りを待った。30年ぶりに父シーボルトが再渡来し、母の滝と娘の高子もイネと共にシーボルトを迎える。はじめは喜びあっていたが、別れていた長い月日からか、親子が打ち解け合うことはなかったと言われている。しかし、シーボルトのおかげで、イネはその後オランダ医のボンペやボードインに学ぶことができ、医学の勉強に磨きをかけることとなる。

シーボルトとの別れ・敬作の死去

◆1860年～1862年（34歳～36歳）

1861年、シーボルトは江戸幕府の顧問となり、三瀬周三は秘書として随行し、江戸へ赴く。しかしながら、江戸で攘夷論者の反対にあい、また世情の変化やオランダ総領事内部の反対もあり、翌年シーボルトは江戸を引き払い再び長崎の地に帰ってくる。一方周三は、国情を知りすぎるのを恐れられ牢獄生活を送ることとなる。

1862年、シーボルトはオランダへ帰国する。シーボルトが長崎を去ったその夜に、二宮敬作が脳出血が原因で他界。突然の別れであった。イネは、長崎寺町の皓台寺(こうだいじ)に敬作の墓を建て葬り、分骨を卯之町に送ったとされる。分骨を葬った墓は、卯之町の開明学校裏にある。

イネ改名

◆1864年（38歳）

伊達宗城の勧めで、イネを改名し伊篤（いとく）とする。

牢獄生活を送っていた三瀬周三は、この年に釈放されている。この釈放は、伊達宗城や大洲藩主へのイネの粘り強い嘆願によるものと言われている。

娘 高子の結婚

◆1866年（40歳）

イネは、オランダ医師マンスフェルトに産科を学び、医学の勉強に磨きをかける。

この年、伊達宗城の媒酌で、娘高子が三瀬周三と結婚。宗城の退隠所（南御殿の一部）で婚儀が行なわれた。

この頃、イネは宇和島へ再三訪れたといわれる。その都度、開明学校裏にある敬作の墓参りをしに卯之町へも訪れたと考えられる。

母 滝の死去

◆1869年（43歳）

この年、母 滝が他界。その後、イネは高子のすすめで大阪に移る。同年9月に大村益次郎（村田蔵六の改名）が京都で刺客に襲われ、傷の悪化で三瀬周三のいる大阪病院で治療することになり、その時イネは大村益次郎の看護にあたっている。

最盛時代

◆1870年～1876年（44歳～50歳）

イネは、後半生を自分一人で生きることを決意し、上京。東京京橋区築地一番地で産科医を開く。その間約7年、患者も多く、1873年には福沢諭吉の推薦で、宮内省御用掛を拝命、明治天皇の第一王子誕生に立ち合っている。イネにとって医者として最盛のときだったと考えられる。

晩年時代

◆1877年（51歳）

イネは7年間の東京での生活後、同年3月再び長崎へ帰る。同年10月、高子の夫 三瀬諸淵（三瀬周三の改名）がコレラで急死したため、高子を長崎へ呼び寄せる。

◆1878年～1888年（52歳～62歳）

1884年に女子医術開業検定試験が実行されるが、イネは58歳の高齢のため、受験を断念し、長崎県令宛に産婆免許鑑札願を提出する。

高子は、医師・片桐重明との間に子供（周三）を生む事態となり、周三はイネの養子とする。その後は、高子に想いを寄せていた医師・山脇泰輔と再婚し、イネに3人の孫ができるが、結婚7年目に泰輔が急死した。泰輔の急死により、イネは高子と孫の生活を考え、再度上京を考える。

◆1889年～1890年（63歳～64歳）

イネ、長崎から上京する。養子周三と、麻布区我善坊町に寄留する。

◆1891年～1902年（65歳～76歳）

イネ、65歳の頃、高子宛の遺言状を作成する。この頃、高子は娘二人を連れ、イネ方に同居する。

イネ、74歳の頃、高子宛の財産譲渡状を作成する。

イネの死去

◆1903年（77歳）

東京府麻生区飯蔵片町において逝去。葬儀は東京で行なわれ、遺骨は長崎の皓台寺に埋葬される。

イネが敬作のもとで医学を学んだ「卯之町」について



卯之町地区は西予市宇和町の中心地で、幕藩時代は宇和島藩の在郷町として栄えた。この地は戦国時代には西園寺氏の支配下にあった。西園寺氏は地区北方の山上にある松葉城を居城としており、卯之町はもともと松葉城の城下町であった。西園寺氏は後に居城を肱川の対岸（地区の南方）の山上の黒瀬城に移したが、卯之町は引き続き城下町として存続した。

廃城後は在郷町となり、四国八十八箇所札所の明石寺の門前町、宇和島街道の宿駅としての性格ももつようになった。当初の卯之町は現在地よりも南西にあり、現在地に移ったのは慶安4年（1651年）と伝える。近代になって、卯之町駅の開設や国道56号の開通に伴って、町の中心が南方へ移動したことにより、卯之町には伝統的建造物が良好に残されることとなった。

町内には江戸中期から昭和初期までに建てられた商家が並び、白壁・うだつ・出格子といった伝統的な美しい町並みが続いている。町並みの中には国の重要文化財である開明学校、市指定文化財の末光家住宅・鳥居門、大正期の建築である卯之町キリスト教会がある。2009年12月に全国で86番目の重要伝統的建造物群保存地区として選定された。



美しい町並み



末光家住宅

鳥居門

※町並みの代表的なイベント(卯のほたる)

歴史ある町並みを、手作り行灯(あんどん)で灯す幻想的なイベント。卯の「ほたる」が飛び交う光景は卯之町の風物詩である。



国重要文化財「開明学校」について



開明学校

卯之町の町並みには、西日本最古級と言われる開明学校が存在する。この学校の前身は1869年（明治2年）に左氏珠山の門下生や町民の有志により建てられた私塾申義堂であった。1872年（明治5年）、申義堂を校舎として開明学校が開校し、1882年（明治15年）に現存する校舎が建設された。

開明学校校舎は、木造2階建、棧瓦葺きで、窓枠をアーチ状につくるなど、わずかに洋風の意匠を取り入れた擬洋風建築である。地元の大工によって建築された擬洋風建築ということもあり、建築史上、教育史上に価値が高く、当時は、フランス風のモダンな校舎として見学者が絶えず、文明開化の到来として注目を集めていた。



(教室風景)

地方にありながら、見聞して理解し得た範囲の洋風要素を取り入れた開明学校は、明治の簡素な学校建築を知るうえに貴重な遺構として、平成9年に国の重要文化財に指定されている。



申義堂